

## 第1回国際地学オリンピックでの International Jury 「国際審判」について

## The International Jury at the 1st International Earth Science Olympiad in Korea

# 熊野 善介 [1]

# Yoshisuke Kumano[1]

[1] 静大・教育

[1] Edu. Shizuoka Univ.

まず国際地学オリンピック規約ではどのように規程されているかを示し、その後、第一回地学オリンピックでどのような仕事をしたかについて簡単にまとめる。

国際地学オリンピック規約に見られる国際審判団について

競技会の国際審判団は委員長と委員から成る。委員長はIESOの主催者により指名される。国際審判団の委員は、それぞれの参加国からの代表団の2名のメンターである。国際審判団としての決議は、75%の委員の出席による多数決によりなされる。参加国は一票を投じることができる。委員長は同票数の場合最終投票を行うことができる。

国際審判団は以下の内容に責任を負う。すなわち、(1) 競技会がルールに則って実施されていることを確認する。(2) 理論問題、実技タスク、それらの解答そして評価スキームを含めたすべての競技内容を前もってチェックする。(3) 試験プロセスをモニターする。ルールに従っていない場合に、競技会から参加者を除外する決定権限を有する。(4) 参加者の解答を採点する手順を指導し、全ての参加者が同様な評価基準によって判断されていることを確認する。(5) 評価の最終結果を承認し、ランキングを確認し、参加者の受賞を決定する。審判団の委員長と委員は公式発表が行われるまで、評価と受賞に関する結果と決定を秘密にしなければならない。(6) 競技会の全プロセスをレビューし、ルールの変更を示唆する。(7) 国際審判団の最終スコアの食い違いを調整する。

第1回地学オリンピックでの国際審判団

第1回地学オリンピックでは10月8日午前9時25分から、国際審判団会議。国際審判団の役割の確認が再度行われた後、問題の作成を行った。各国から出された問題や、韓国の国際オリンピック委員会関係の大学教授により作成された問題について提案があり、参加各国の国際審判が一つ一つ問題の検討を行った。国際審判団は5人が地質学、2人が気象学、2人が天文学、1人が海洋学であり、分野ごとの教授の交流は行わないというのが最初の計画であったが、結局、第1回IESOは規模が小さいので国際審判全員で検討することとなった。出題問題は約2倍の量が用意されており、一つ一つ検討し、文言についてはアメリカとインドの国際審判がリーダーシップを取りながら訂正し、問題の内容について全員で検討し、どれが適切であるかの判断をし、最終判断は、今回の開催国の委員長と副委員長、並びに、次回の開催国であるフィリピンの国際審判の3人で行うことが合意された。

10月8日から9日までの2日間をかけて問題の作成を行った。まず、地質学の問題を作成した。候補の問題を議論しながら、まず、どの問題が適切かを話し合った。その後、内容を詳しく検討し、必要に応じて質問の内容を検討した。最終的に、今回の大会実行委員長と副委員長、次回のフィリピンの実行委員長が国際審判の推薦をもとに、問題を選択した。夜12時ごろまでかかった。高校生とコンタクトは行わないことが確認され、携帯電話を集められた。また、インターネットへのアクセスも禁止された。

10月10日の午前中、われわれが作成した問題で午前中に筆記試験、午後を実地試験を行った。基本的に大変スムーズに進行した。試験の採点は10日の夜に行われた、基本的な合意事項として、大学の国際学科の学生が英語に訳して、訳したものを国際審判が採点することになっていたが、学生がうまく訳せない言語（インドネシア語など）があり、国際審判が訳を行う国もあった。夜中の2時ごろまで採点が続く、複数の国際審判が採点を行い、点数が異なる場合、審判同士の話し合いが持たれ、合意した場合同じ点数となったが、合意できない場合、点数はそのまま入力され、平均点が採用された。